

出題分析		
試験時間 60分	配点 50点	大問数 6題
分量 (昨年比較) [減少 <input type="checkbox"/> 同程度 <input checked="" type="checkbox"/> 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 <input type="checkbox"/> 同程度 <input checked="" type="checkbox"/> 難化]	
<p><b>【概評】</b></p> <p>大問数は昨年度と同様だが、設問数は1問増加した。時代範囲は原始・古代～現代を対象とし、大問Iは3年ぶりに全体が原始時代となった。問題形式は選択・記述併用式で、選択問題では「2つ」を選択する問題が昨年度から1問増加し3問となった。大問VIは例年通り文化史を中心にした出題であり、今年度は、近年の研究で新たな知見が得られた絵画や絵師の紹介をリード文とし、図版は歌川国芳の浮世絵「浮世又平名画奇特」(部分)が掲載された。一部では教科書注記レベルの細かい知識が必要な難問も見られたが、多くは標準レベルの問題で占められており、易化していた昨年度と同程度の難易度と言えよう。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	原始時代の概観	旧石器時代～弥生時代の事項が問われたが、大半が基礎的な内容のため完答を目指したい。問3. 漢字表記に注意。問6. イは正しいが、アを誤りと断定できるかは疑問。	やや易
II	弘仁格式序 (史料)	類出史料である『弘仁格式』の序文をもとに、古代の政治史・文化史が出題された。問5. イは、舎人親王が『日本書紀』編纂に関わったこととの混同に注意。問6. エは一見難しいが、下線部cの直前に「律令を撰し、各十巻と為す」とある。	標準
III	御成敗式目・建武式目・嘉吉元年の徳政令 (史料)	4つの史料をもとに、中世の社会史・文化史が出題された。史料iが建武式目、史料iiが御成敗式目の一部であることは知っておきたい。史料iiiは初見だろうが、問5から嘉吉の徳政一揆後に出された徳政令と推定できる。史料ivは史料iと同じく建武式目の一部。問3. Zの盆踊りは、風流踊と念仏踊りが結びついて戦国時代頃に生まれた。問4. 御成敗式目の「女人養子」は、内容まで正確に押さえておこう。問7. 史料i～iiiが何の史料かを判断できれば、消去法でも正解できる。	標準

設問別講評			
IV	江戸城と将軍	江戸時代の政治史・経済史が出題された。問 4. やや難。『中朝事実』の書名を想起して山鹿素行を導く。問 6. イ・ウ・エは細かいが、オの誤りは標準的な知識であり、惑わされないように。問 7. C は、B の直後に行われた小御所会議で決定された。D は教科書では触れられているが、細かい。	標準
V	選挙法と議会政治	近現代の政治史・経済史・文化史が出題された。問 1. ウ・エは建白書の内容を知らなければ判断できないだろう。問 2. オは教科書の注記にあるが細かい。問 3. イ・ウはいずれも教科書の注記にあるが細かく、ウはそもそも文意がとりにくい。問 5. ウの「利益線」は朝鮮のみとされる。正解のエも細かい。問 6. 新派劇と新劇の区別に注意。問 12. 「連合」の正式名称は難。	やや難
VI	前近代の絵画	院政期～近世にかけての文化史（絵画史）が出題された。問 1. 2020 年度の文学部では「飛倉の巻」の出典としてこの絵巻の名が問われていた。問 4. 難。イの観世能の図は教科書にもあるが、出典は国立歴史民俗博物館所蔵の『洛中洛外図屏風』であり、まぎらわしい。問 6. 2020 年度の文化構想学部では、歌川国芳の作品として『朝比奈小人嶋遊』を選択させる問題が出されていた。	標準

#### 合格のための学習法

早稲田大学文学部の日本史は一部で難問が見られるものの、ほとんどが基本的な問題で占められているため、教科書の記述内容を正しく理解し、覚えていれば高得点を狙えるだろう。教科書は欄外の注記や図版・地図・史料などの解説文もよく見ておくことが重要である。文化史は必ず出題され、美術作品の写真などの引用も多いので、教科書のみならず図録などを用いて、出典を含めてチェックすることが求められる。記述問題では誤字などのケアレスミスが無いよう、漢字で書く練習も忘れないように注意したい。